

# 武蔵野 ヒストリー

武蔵野にまつわる歴史を  
楽しみながら学ぶ

## 井の頭恩賜公園の 自然環境

もうすぐ開園100年を迎える  
井の頭恩賜公園。緑豊かなこの公園には、  
毎日多くの人々が訪れています。  
今回は、時代とともに変化してきた  
公園の自然の様子を紹介します。



御殿山地区入口（年代不明）。

井の頭恩賜公園内にある井の頭池  
では、2015年11月から約5カ月  
間、2回目となる「かいぼり」が行われ  
ました。池の水を入れ替えることで  
池底が見えるほど透明になり、現在で  
は水質も随分改善されつつあります。  
昔の自然を取り戻すために動き始  
めている井の頭恩賜公園ですが、開園  
からこれまで、公園周辺ではどのよう  
な自然環境の変化があったのでしょ  
うか。

### 江戸時代は幕府の、 明治時代は皇室の御用林だった

井の頭恩賜公園の変遷を語るう  
えで、まず忘れてはならないのが、  
徳川將軍家の存在です。井の頭池  
と周辺の林は、幕府の御用林として  
保護され、將軍家の鷹狩りや、槍や  
鉄砲による狩猟の場とされていま  
した。訪れた家康が、湧き出る水で  
よくお茶をたてたことから名づけ  
られた湧水スポットの「お茶の水」  
は今なお残り、三代將軍の家光が、  
この水を井戸の中で一番と評した  
ことから、池は「井の頭」と呼ばれる  
ようになったという説もあります。  
井の頭池周辺の歴史と自然に詳  
しい昆虫博士の須田孫七先生は「鷹

狩りの際には、將軍が来る前に害鳥  
を処分することが住民に命じられ  
たようです」と話します。「駆除対  
象の筆頭はカラスですが、文献の中  
にはオオタカやトビの名前も見  
ることができるとのこと。害鳥の駆  
除には、もうひとつ別の目的もあり  
ました。「江戸時代には、薬草の採  
集も行っていました。人と植物の  
関係は今よりも深く、どの植物  
なら食べられるのか、毒なのか薬に  
なるのかを探っていたようです」

明治時代に入っても井の頭池は  
東京府民の大切な水源だったため、  
明治15（1882）年、東京府は池  
の周囲に杉の苗10000本を植樹  
するなどして、池の涵養に務め、明  
治22（1889）年には、一帯が東  
京府の所管から皇室の御用林とな  
りました。今でもこの池の周囲はさ  
まざまな植物が植えられています  
が、大正時代に撮影された池周辺の  
写真を見ると、杉の木などの針葉樹  
が周囲を覆い、今よりも鬱蒼とし  
ていたことがわかります。

大正6（1917）年には井の頭  
恩賜公園が開園。湧水と緑の豊か  
な公園の誕生に、多くの人々が来園  
し賑わっていたようです。



大正6（1917）年、鬱蒼とした杉林に囲まれ水草が浮く井の頭池。



昭和19（1944）年、被災殉死者の棺材として大量に伐採された杉。

### 太平洋戦争によって 大きく姿を変えた井の頭の自然

しかしその杉林を含む井の頭池周  
辺の自然は、昭和16（1941）年に



昭和60 (1985)年



昭和16 (1941)年



マツヤニを採取した傷跡が残る松の木は、現在も動物園内に20本以上残っている。

井の頭池周辺の自然環境は、高度経済成長期で都市化が進み大きく変化した。

始まった太平洋戦争によって大きな打撃を受けることになりました。東京のなかでも自然が豊富であったことから、軍用材や被災殉死者の棺材などのために杉も松もほとんどが伐採されてしまったのです。土も掘り返されて、表面に生えていた草ごと調布の飛行場に運ばれ、軍用機の格納庫を隠すために使用されました。現在、井の頭池周辺に見られるケヤキやサクラ、モミジなどは、戦時中にほとんど伐採され、戦後になって東京中の公園から集められ植樹されたものです。

また、動物園内には幹にV字の傷がある巨大な松の木が点在しています。これらは、戦闘機の航空燃料や潤滑油にするためにマツヤニ(樹脂)を採取したときの傷で、戦争の記録を伝える象徴として、現在でもその痕跡を見ることができます。

### 高度経済成長期による水生生物の変化

昭和20(1945)年の終戦直後、井の頭池も今とはまったく異なる、自然豊かな姿をしていました。ヨシが群生し、エビモ、コウホネ、ヒシなどの水草も多く生息していました。

なかでも外来種であるオオカナダモは、ボートが漕げないくらい大繁殖しており、その除去のため外来魚のソウギョが池に放たれるほどでした。また、昭和32(1957)年には、その名を冠したイノカシラフラスコモという藻も井の頭池を源流とする神田川上流で発見されています。それほど池の水がきれいでも、水生生物が多く見られたのです。

しかしその後、高度経済成長期で都市化が進み、昭和38(1963)年には近隣のマンション建設などの周辺地域の開発に伴い地下水脈が切れ、湧水も枯れて池が干上がったことで植物は急激に減少しました。それからは井戸の水を汲み上げて池を維持するも、家庭排水の流入などもあって水質は一気に悪化、戦後生息していた水生生物はほとんど絶滅してしまいました。

当時の井の頭池を知る須田先生も「私が小さな頃は、池の水もとても澄んでいました。七井橋の上から水中を泳ぐウグイの群れや、淡水クラゲなどの姿が見えたほどです。しかし戦後まもなく宅地化が急激に進んで、湧水量が減少してからというものの、池の中は外来種ばかりが幅をき

かせるようになりました」と話します。

### 生物多様性が実現する自然環境の復活を目指して

こうした池の状態を改善しようとして、「かいぼり」の1回目(2013年)に行われました。「かいぼり」とは、農用水池などを浄化するために、古くから伝統的に行われてきた方法です。水をきれいにするだけでなく、外来生物の駆除や水草の再生なども目指しています。「かいぼり」を重ねるごとにオオクチバスやブルーギルなどの外来魚が多数捕獲され、水の透明度が増したことで太陽の光が池底まで差し込み、水草の育つ環境も整えられてきています。水草が多く自生するようになれば、水が自然浄化されて、昔のように美しい池がよみがえり、豊かな水生生物を目当てに多くの水鳥たちも集まってくるはずですよ。

池の復活とともに、その相乗効果で、周囲の木々などにも昆虫をはじめとする小型動物がたくさん生息できるような、そんな生物の多様性が見られる自然環境が、井の頭恩賜公園に戻って来ることでしよう。